考古学六十年

梅原末治著

平凡社

考古学六十年

考古学六十年
定価　一、二〇〇円
昭和四十八年五月十六日　初版第一刷発行
著者　梅原末治（うめはらすえじ）
発行者　下中邦彦
本文口絵製版印刷　株式会社　便利堂
製本　株式会社　石津製本所
発行所　株式会社　平凡社
郵便番号　一〇二
東京都千代田区四番町四番地
電話東京（二六五）〇四五一（代）
振替　東京　二九六三九番

落丁・乱丁本はお取替えいたします　© 梅原末治　1973

0023-441010-7600

はじめに

私は今年の夏、満八十歳の誕生日を迎える。

明治の終り近く、中学を卒業しただけで、好きな考古学に首をつっこんでから六十余年、私の歩んで来た跡は、日本、特に京都に於ける考古学の発達とほぼ並行していた。

身体の都合などで、高等学校へも大学へも進学できなかった私は、自分のエネルギーのすべてを考古学へ注ぎこんだ。幸運にも、当時は、そうした情熱と努力が報いられる客観的条件が揃っていた。私が門を叩いた草創期の京都大学文学部の諸先生は、いずれも快く私を受け容れ、指導して下さった。あらかじめ定められた運命を暗示するかのように、南河内の巨大な古墳群の真只中で生を享けた私は、こうして、殆ど迷うことなく、一筋の道を邁進することができた。

八十歳を自祝する意味もこめ、私は、私の歩みの概略を書き残しておくことを思い立った。私がどのようにして考古学に志し、諸先生がたがどのようにして私を導いて下さったか。日本の古墳墓の調査から始まって、朝鮮半島の遺跡調査、そして中国を中心とした東亜考古学へ、私がどのような経過で手をのばして行ったか。こうした問題を書いておくことは、単に個人的な昔ばなしのみに

終らず、日本に於ける考古学の学説史とも若干のかかわりを持ち得るであろう。いま、私の脳裏にあり、やがて誰にも知られずに消えてゆくことも決して少なくはあるまい。それらをともかくも書き残しておこう。そう考えて、私は原稿用紙に向った。

私の書いたものを一度でも御覧になったかたは、この書物の文体が全く違っていることにすぐ気づかれるであろう。等身大に及ぶ考古学の著書を持つ私ではあるが、それらはすべて読みにくいと定評ある学術論文ばかりで、この種の書物は書いた経験が殆どない。原稿を書き出してはみたものの、恍惚の年齢とも関係して、思うこと、言いたいことが文字にならない。家の者は「何千年も前のモノの考古学では、現代の人間の話は無理だ」とからかう始末である。そこで、私の趣旨に賛成してくれた一子の郁が、一夏をついやして私の長物語をきき、彼が彼の文章でこの伝記をまとめあげてくれた。だから、自伝といっても、そこに当然私自身が書くのとは異ったニュアンスや取捨選択が加わっているのもやむを得ない。

何だか考古学学説史と間違えられそうな『考古学六十年』という書名を冠せたのにはささやかな理由がある。私のイギリス留学中、ガザの発掘その他で、師となって指導して下さったのはペトリ先生であった。私は先生の影響を受けるところが少なくなかった。先生には『考古学七十年』の著がある。私もなつかしい先生を想い出しつつ、そのひそみにならい、相似た題名をつけたかったの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

である。
この書物ができあがるについては、平凡社の中嶋洋典氏、便利堂の石黒豊次氏の好意に負うところが多い。また巻末の著作目録は、私が退官する時、教室の諸君が作って下さったものを増補して採録させて貰った。関係諸氏に衷心より謝意を表する次第である。

昭和四十八年一月

梅原末治識

目次

はじめに……i

一　考古への道

生い立ち……1
歴史地理学会に入る……8
京大とのえにし……18
朝鮮半島とのかかわり　金冠塚など……37
古鏡から青銅器へ……59

二　異国にて

あこがれの旅……67
南欧とエジプト……84
スウェーデンとロシア……97
フランス　ヨーロッパの旅　再びロシアへ……111
アメリカに渡る……125

三　新しき門出

東方文化学院と中国青銅器研究……137
楽浪と通溝……155
京都大学での日々……179
殷墟遺物の調査　華北……191

四　戦後の考古学

新たな国内調査　法隆寺ほか……204
大学を離れて……222

むすびにかえて……230

＊　著書・論文目録……237
＊＊　発掘調査略年表……327

一　考古への道

生い立ち

緑の田園のかなたに金剛、葛城の連峰が長く尾を曳き、単調さを破るようにそこここに老松の繁る古墳が点在する。私の生を享けた明治二十年代の大阪南河内は、ベッドタウン化した現在からは想像もできぬのどかな近郊農村であった。

南河内郡古市（ふるいち）村軽墓というのが私の村の名称である。軽墓の名は、軽皇子（かるのみこ）の墓、すなわち日本武尊の白鳥山陵といわれる大きな前方後円墳に由来する。青々と水をたたえた御陵の堀に沿って四十軒ばかりの家が一村を形成していた。私の生家は兵庫県但馬の出と伝えるが、かなり早くからここに移り住んで農業に従事し、ある程度の余裕が生じると繭の仲買なども行い、明治十六年には村の総代に選ばれるに至っていた。

私は、明治二十六年八月十三日、梅原宗八の七男として呱々の声をあげた。兄弟は男ばかりだった。上の四人は異母兄で、そのうえ末治の名が示すように、末っ子の私とは十歳以上も年齢差があ

日本武尊 白鳥陵 左下の家並が私の生家のあった軽墓

り、既に京都へ奉公などに出てしまっていた。幼年期は、田舎の子供がやるように、池にたらいを浮べて菱の実を採ったり、めだかや小鮒を追いまわしたりする平凡なものであった。しかし、家にいたお手伝いの老媼からとりわけ可愛がられた。今でいう過保護のせいもあって、腕白連中と外で遊ぶよりも、読み書きを習う方に興味を持ち、次第に子供仲間から変り者として扱われるようになって行った。当時はのん気なもので、私が勉強が好きだという噂がたつと、家にいても仕方がないから学校へやれということになり、六歳の九月から古市村の小学校に通わされはじめた。入学の際、左手で字を書くのをやめるようにと条件づけられたことが記憶にあるが、これはしばらくの間大変苦痛だった。

軽墓から古市までは、今でこそ羽曳野市の中心街になっているが、当時は寂しい場所で、子供たちは集団で登下校した。ちょうどこの頃、柏原から富田林まで河南鉄道が敷かれ、一日数回汽笛とともにマッチ箱のような陸蒸気が往復しはじめた。文明の利器に驚喜した学童は汽車が通るたびに歓声をあげたが、あんまりノロノロ走るため、誰いうとなく、河南をもじって「あの蒸気はカナワン、カナワンといって走っている。あれはかなわん鉄道だ」と、はやしたてたりもした。

十歳の時に父が急死したが、家計の方はそれによって特別に変ることもなく、末っ子の気儘で自由な生活が続き、やがて小学校の課程を了えると、現在の藤井寺から古市に至る七ヶ村合同で設立

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

された誉田高等小学校に進んだ。この頃の小学校の教員は僧侶が兼任している人が多く、誉田の校長も隣村の僧葭原善暁だった。しかし、河内の田舎にも、時代の波は押し寄せ、天王寺師範を優秀な成績で出られた滝野政治郎、あるいは岡山県出身のクリスチャンの栗田よし子といった先生が着任され、古い教育は変えられつつあった。高等小学校は現在の中学あるいはそれ以上の価値があり、私の村からはそこに通う者は稀であった。私は高小で、狭い地域共同体からおぼろ気ながらも広い世界へ眼を向けはじめた。

若い先生がたは、日本の興隆期にあたり、情熱を持って我々を指導された。父がなく、母も周囲も勉強とは縁の遠い環境にいた私は、これら諸先生の下宿にいりびたり、学業ばかりでなく、一身上のことまで面倒をおかけした。

二年生の冬に日露戦争が勃発し、日々伝えられる戦果は子供心に大きな刺激を与えた。とりわけまだ見ぬ、満州・中国に憧れと知識欲をかりたてられ、歴史と地理に熱中するようになった。当時の制度では、中学は高小二年修了で受験できた。しかし、大阪には北野・八尾・堺のほか、ようやく高槻と富田林に中学が開設されたばかりで、通学や経済面の問題で家の賛成を得ることができず、そのまま高小四年の全課程をおえた。

卒業してみても、学問に対する興味は捨てきれず、農事・奉公いずれも不向きなことは明らかな

私の前途について、家族・親類はいろいろと思いをめぐらした。河内は一種の文化の谷間のような性質を持ち、迷信や新興宗教を信ずる者も多かった。私の行く先をどうするかについて、生駒に近い瓢箪山の稲荷に占いに連れて行かれたのもこの時の想い出として心に残っている。結局、皆で考えられたプランは、この地方で末子がやらされる風習のように、縁故の家か、どこかの寺を継ぎ、そこから師範学校に進めばどうか、というものであった。私にはこうした道はとても耐え難く思われ、いっそのこと大都会に出て一人で生きようと真剣に考えた。そこで愛読していた『大戦小志』の著者志賀重昂先生に書生においていただき、朝鮮や樺太に同道して下さるよう手紙で懇願した。この無謀な申し出にも拘わらず、先生は早速「その志向は諒とするが、それに進むには自ら常道がある。まず中学の課程を了えるのが先決と思われる。君の志す道における個々の問題についてはこれからも助言しよう」といった意味の返事を下さった。

こうした経緯を、早くから京都に出て捺染（なせん）の仕事をしていた異母長兄が知り、それほど希望するなら、自分が何とか中学の世話をしようではないかと言ってくれた。三十二歳の宗作という名のこの兄と自分は、それまで殆ど没交渉であったが、その好意に甘え、明治四十一年の秋、京都の地を踏んだ。長兄は老婆と二人暮らしで、河内とは打って変った環境に淋しさを覚えたのも束の間、目新しい京都の寺社めぐりなどに気持を奪われ、楽しい日々を送った。翌年、名校長中山再次郎を慕

って、京都二中を受験したが、こと志と違って失敗してしまった。兄は何も言わず、即日、自ら同志社に連れて行き、その普通学校入学の手続きをとってくれた。

原田助氏を校長に頂く同志社は、創設者新島襄の素志である大学設立に向って邁進していた。普通学校も他の中学とやや異り、一週間を知育、徳育、体育に、五日、一日、一日と配分する三位一体の教育を行っていた。先生がたは今では想像できぬくらい母校愛に燃えて教鞭をとられ、生徒も全国から集まり、田舎者で、広い世界に憧れていた自分には、こよなき勉学の場となった。これを志賀先生にお知らせすると、大変喜んで激励して下さったのも一つの想い出である。

毎朝七時四十五分、チャペルの礼拝ではじまる学校まで四キロ近く、私は西大路三条から歩いて通った。兄は自転車に乗れと言ってくれたが、運動神経の特別にぶい私は、とうとう自転車を走らせることができなかった。

同志社では各授業のはじめ十分くらいを、前の時間の復習にあてていたが、これは Do not till tomorrow what you can do today. というモットーとともに、そののち私の生き方に深い影響を与えた。大好きであった地理は、博識で実地にも詳しい加藤延年先生、歴史は教科書に拘泥せぬ波多野教頭に教えられ、ますますその方面への興味を増して行った。ところが二年生の後半、苦手中の苦手の鉄棒から墜落して人事不省に陥り、三ヶ月間も寝こんでしまった。この間、身長が六センチ

ものび、痩せて青白くなった私に、友人たちは「白骨」という有難くないニックネームをつけてくれた。

兄に厄介をかけているのに、もう一年留年しなければならぬかと意気消沈していた私の予想に反し、学校側は、成績は平常点を重視し、試験は副次的に扱うという立場をとってくれ、無事進級できたのには感激した。後年私が、学生諸君に、毎時間の終りに授業内容を書かせ、期末試験に重きを置かなかったのはこの時の経験に基いている。

明治二十四年、ウェストンによって口火をきられた日本アルプスへの近代登攀は、やがて、小島烏水らの日本山岳会を生んだ。愛宕山にでも登るのが精一杯という体力の私も、身のほど知らずに未知の高峰に思いをはせ、志賀先生の口添えで雑誌『山岳』を購入し、槍や穂高を夢見たこともあった。こうした外の世界へのロマンティシズムを満足させ、さらに一層かきたたせる出来事があいついで起った。まず、中央アジアを踏査し、楼蘭の遺跡を発見したスヴェン・ヘディンが地学協会の招きで来日し、京都と東京で講演した。私は『地学論叢』に載ったその筆記録を暗記するまでにむさぼり読んだ。これが契機となり、同じ中央アジア探検を行った、我が大谷探検隊、敦煌千仏洞の遺物を持ち帰ったことで有名な、イギリスのスタイン、フランスのペリオ探検隊のことにも子供心に興味を抱いた。これら西域調査の遺物の一部は北京にもたらされていた。京都大学の諸先生は、

それを調査され、明治四十四年二月、その展観が行われた。私はここではじめて、後年親炙した諸先生の声咳に接し、判らぬながらも、学問的雰囲気に身を置く満足感にひたった。一方、同志社でも、来朝されたアッシリア学者のセイス教授の講演会が開かれた。中学から専門学校までの学生をチャペルに集めたこの会では、長身痩軀の教授の姿が印象に深かった。

歴史地理学会に入る

地理と歴史への興味は病みつきに近いものとなり、三年生になると生意気にもその方面の専門誌『歴史と地理』を購読しはじめた。その歴史地理学会の夏期大講演会が山口県長府で開かれ、兄に無理をいって参加したことが、以後の私の進路を決定したといってよい。

大阪から二昼夜の心細い船旅で辿りついた長府には、錚々たる大学教授をはじめ、全国から八百人を越える人々が集まっており、私のような子供は殆ど見当らなかった。「海の日本」というテーマのこの会で、連日、大勢の先生方が講演された。鎖国の間に日本文化の充実があったという趣旨のことを話された内田銀蔵博士の講演をはじめ、小川琢治、黒板勝美、喜田貞吉ら諸先生の声と姿が、今でも耳と眼にやきついている。黒板博士は別にエスペラント語に関する特別講義を行われ、ここで私は学問の広さ、あるいは語学力といった問題に新しい示唆を与えられた。史蹟の臨地見学

で、小船に分乗して壇の浦沖へ漕ぎ出し、潮の干満によって源平の合戦をしのぶという面白い試みがなされた。この時偶然、私と同船されたのが喜田貞吉博士であった。博士はまだ四十前後、文部編修のかたわら、歴史地理学会の有力メンバーとして活躍されていた。私は、盲蛇におじずの諺通りどんなに偉い先生に対しても常に積極的態度をとることにしていたので、同船を機に博士に近付き、多くの教示を得たばかりでなく、爾後の研究にも大きな便宜、影響を与えられたのである。のちに喜田先生は「ふつうは教授が門人帳に入る何人か弟子を持っているのに、梅原は一小僧のくせに何人もの教授帳を持っている」と仰言った。現在では困難なことかも知れぬが、良い先生とみると、私は周囲の事情をあまり考慮せず懐にとびこみ、先生方もまたそれを受け容れて下さった。このことは私の人生の最大のプラスであったと考えている。

長府からの帰途は山陽道の寺社・古跡をめぐり、約一ヶ月の長旅の間に、歴史と地理の実地調査への関心を加えることができた。秋に入ると、早速同好者十二、三人を集めて『歴史と地理』の購読をすすめた。また学会の若い幹事寺田貞次氏の指導を受け、四隣の見学をはじめ、次の春休みには、一人で紀三井寺から高野山、吉野地方を巡歴した。寺田氏は京都大学地理学科の第一回の卒業生で、当時二条駅の近くに住んでおられた。家が近かったため、私は足しげくお邪魔し、氏を通じて小川琢治先生の研究室を訪れる機縁を作って貰った。戦前、京都大学の国史学に一時代を劃した

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com